

# 待兼山俳句会

第六百九十二回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子  
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和六年九月九日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室 締切 午後二時

出席者 瀬戸幹三・山戸暁子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東中 乱・森 茉衣

山田安廣

投句者 上田恵子・植田真理（選句のみ）・碓井遊子・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・

根来眞知子・平井瑛三・向井邦夫 以上出席者九名＋投句者十一名 計二十名

兼題 蝨・梨（幹三） 夜長・葛の花（暁子） 当季雑詠 通じて八句

次回 例会 令和六年一〇月二一日（第三月曜日） 会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時

兼題 秋の日・稔り田（幹三） 柿・茱萸（暁子） その他当季雑詠

選者吟

太く鳴き我はここぞと蝨

幹三

嫁にゆく狐に持たす葛の花

父に似て来りし長き夜の鏡

忘れてはまた読み返す夜長かな

暁子

葛原に風渡るとき花の見ゆ

一人用テントを張るやきりぎりす

## 幹三 選

逞しき葉に逞しき葛の花

◎忘れてはまた読み返す夜長かな

◎シーソーの動かぬ支点きりぎりす

古民家の奥行き深き秋日かな

耳ふさぎ怪談せがみ来る夜長

寂光院山辺に隠る葛の花

長編にゆつくり浸る夜長かな

わけ入ればたと鳴き止む昼の虫

さりさりと梨食ぶ音や夫無言

虫を聴くひとり野に居る心地して

◎長き旅終へし余韻の夜長かな

いぢけたるちよつと歪な梨を剥く

一人用テントを張るやきりぎりす

葉のうねりに身をまかせゐる葛の花

放棄地にのたうつ葛の花赤し

◎飛ぶよりも跳ぶが楽しき蝨蠅

いざ校正念には念をこの夜長

◎蝨斯手にはて妹はどこ行つた

◎葛原に風渡るとき花の見ゆ

安廣

暁子

兵十郎

盛雄

兵十郎

乱

茉衣

輝子

真知子

輝子

翠

輝子

暁子

暁子

安廣

安廣

乱

翠

暁子

葛咲くや途絶えさうなる獣道

暁子

入れたての義齒快調や梨を食ぶ

瑛三

硬さ動き手に心地よききりぎりす

乱

旅支度思ひ巡らす夜長かな

堯子

いかんせん夜長を嘆く友見舞ふ

恵子

長き夜や悔ゆるも止めぬユーチューブ

邦夫

マンションの思ひ思ひの夜長の灯

暁子

余命まで告げられ帰路のきりぎりす

恵子

電車の音絶えて夜長の看取りかな

瑛三

長き夜の闇のしじまの重さかな

安廣

子の籠に片脚もげたきりぎりす

輝子

ギイーチョンと句点忘れぬきりぎりす

乱

## 幹三 特選句講評

・忘れてはまた読み返す夜長かな

暁子

読書を存分に楽しめるのも夜長。一度読んだ本の読み返し  
なのか、現在読んでいる小説の伏線の確認なのか。読み手の  
経験・想像に任せられています。

（「長編にゆつくり浸る夜長かな」（茉衣）という句もありました。同じ雰囲気の句なのですが、大括りにしないで個々の事象を写生することで懐の広い句が生まれると思っていま  
す。）

・シーソーの動かぬ支点きりぎりす

兵十郎

この句は採らないか、採るなら特選という句です。解釈は  
さまざまです。私は草むらの一点で正確に鳴き続けるきりぎ  
りすをイメージしました。思い切った取り合わせです。

・長き旅終へし余韻の夜長かな

翠

何かをする夜長ではなく、何かを終えた後の夜長というの  
が新鮮でした。ゆつくりと丁寧に記憶が作られて行く時間で

・飛ぶよりも跳ぶが楽しき蠢蜥

安廣

本当のことは分りません（笑）。しかし硬い翅を広げての  
飛翔は力も必要だし、危険です。その点あの逞しい脚で跳ね  
るのは楽しいのではないかと。きりぎりすを愛している視  
線を感じました。

・蠢斯手にはて妹はどこ行つた

翠

広い草っぱらで虫採りに興じていると、あら？妹の姿が見  
えない：というノスタルジックな思い出です。そのうち草の  
中から妹がひよっこり顔を出す、手にはもそもそ動くきりぎ  
りすの硬い感触。

・葛原に風渡るとき花の見ゆ

暁子

風の行く手に沿ってさーっと景が変わっていきます。紫赤  
色が出現すると共に、香りも感じられます。葛原の広さや傾  
斜、その日の天候など読み手にも記憶が蘇ります。

## 暁子 選

逞しき葉に逞しき葛の花

安廣

長き夜や四時間半のオペラ観る

翠

◎余命まで告げられ帰路のきりぎりす

恵子

国宝の塔を住処に蠢蜥

輝子

◎秋の夜や賢治の童話再々読

眞知子

電車の音絶えて夜長の看取りかな

瑛三

露天風呂夜長に星を一人旅

◎風に生るる葉裏の花や真葛原

父に似て来りし長き夜の鏡

マイセンの鉢に梨盛る昼下がり

長編にゆつくり浸る夜長かな

◎わけ入ればはたと鳴き止む昼の虫

大陸を二等寝台長き夜

病癒ゆ報せ届きし今朝の秋

太く鳴き我はここぞと蝨

蝨斯実家の土間の懐かしく

いざ校正念には念をこの夜長

赤ちゃんのおつむかそつと撫でる梨

葛の花電柱極めなほ先を

夜半の秋そうだあの本あったはず

蝨スロボットめくや脚の技

莫産ラジオ抱え夜番の梨畑

入れたての義歯快調や梨を食ぶ

新種梨出て二十世紀遠くなり

風雪の厩舎を囲む葛の花

堯子

瑛三

幹三

茉衣

茉衣

輝子

和江

安廣

幹三

朱美

乱

和江

乱

眞知子

遊子

恵子

瑛三

堯子

和江

## 暁子 特選句講評

・余命まで告げられ帰路のきりぎりす

恵子

重い句であるが、こういう体験をされた方々を幾度か身辺に見てきたので、胸に沁みた。しかしきりぎりすの声に気付かれるくらい心の余裕を持つておられることに少々救われる思いだ。

・秋の夜や賢治の童話再々読

眞知子

賢治の童話が余程好きなのだろう。再々読程度ではないかもしれない。秋の夜・読書・賢治というのはよくある組み合わせであるが、「再々読」が面白いと思った。

・風に生るる葉裏の花や真葛原

瑛三

葛の葉は裏が白いので、風が吹いて大きい葉が翻ると真葛原は一面に白く見える。その大きな葉の陰に咲く花は風が吹いた時に姿を見せる。「風に生るる」は上手い表現だ。中七下五の「は」音も効いている。

・わけ入ればたと鳴き止む昼の虫

輝子

虫たちは非常に敏感である。特に昼間は人の気配が近づくことが多いので「昼の虫」にはあわれを感じる。人間の方は邪魔をするつもりはないのだが。

### 互選三句

朱美 選

シーソーの動かぬ支点きりぎりす

兵十郎

中天に月貼りつきてビル眠る

安廣

みずみすし砂丘の国の梨の味

遊子

息子一家の旅の土産に砂丘の梨を頂いたところです。

瑛三 選

大手門見上げて鳴くやきりぎりす

暁子

葛咲くや途絶えさうなる獣道

暁子

露天風呂夜長に星を一人旅

堯子

夜長を楽しむ様子がよい。ただし星空、星座をとすべき。

和江 選

葛原に風渡るとき花の見ゆ

暁子

山村に夜長の重さのしかかる

幹三

飛ぶよりも跳ぶが楽しき蝨

安廣

虫の動きの面白さが漢字から伝わります。

かな子 選

新米が今年も届く元気でね

朱美

いぢけたるちよつと歪な梨を剥く

輝子

梨半分明日に残して老い眠る

翠

矜持をもつて孤高を生きる。されどホロリと淋しい。

邦夫 選

入れたての義歯快調や梨を食ぶ

瑛三

山村に夜長の重さのしかかる

幹三

葉のうねりに身をまかせぬる葛の花

暁子

葉が風にうねると美しい葛の花が甘い香と共に現れる。

恵子 選

電車の音絶えて夜長の看取りかな

瑛三

推敲をすれど凡句の夜長かな

暁子

入れたての義歯快調や梨を食ぶ

瑛三

ニコニコして梨を召しあがる亡き母が浮かびました。

堯子 選

亡き妻に梨の記憶を供へけり  
長き旅終へし余韻の夜長かな  
飛ぶよりも跳ぶが楽しき蝨  
鋭い観察眼で意味の異なる「とぶ」の繰り返しが効果的。

盛雄

翠

安廣

輝子 選

風雪の厩舎を囲む葛の花  
耳ふさぎ怪談せがみ来る夜長  
嫁にゆく狐にもたす葛の花  
童話、あるいは民話の世界。読んでいて楽しくなった。

和江

兵十郎

幹三

兵十郎 選

放棄地にのたうつ葛の花赤し  
さりさりと梨剥く夜の更けてゆく  
国宝の塔を住処に蝨  
国宝に住む蝨とは、すばらしい音色であろう。

安廣

幹三

輝子

茉衣 選

新しき避難路覆ふ葛の花  
夜は長し議論は今日も平行線  
山村に夜長の重さのしかかる  
山村に地震や台風の被害甚大を連想しその夜長を悼む。

兵十郎

輝子

幹三

眞知子 選

長き旅終へし余韻の夜長かな  
みずみずし砂丘の国の梨の味  
太く鳴き我はここぞと蝨  
蝨の声は太くてわかりやすいがでも見つけにくい。

翠

遊子

幹三

眞理 選

さりさりと梨剥く夜の更けてゆく  
電車の音絶えて夜長の看取りかな  
大陸を二等寝台長き夜  
旅に希望と不安を抱く若者が目に浮かびました。

幹三

瑛三

和江

翠 選

推敲をすれど凡句の夜長かな  
大風に落ちたる梨や天仰ぐ  
入れたての義歯快調や梨を食ぶ  
良かったですね。おめでとうございます。

暁子

邦夫

瑛三

盛雄 選

廃坑のトロツコに乗るキリギリス  
暴風を避けて挽きたる梨届く  
長き夜の闇のしじまの重さかな  
秋の夜長の静寂を重いと、うまく詠っている。

和江

堯子

安廣

安廣 選

葛の花電柱極めなほ先を

乱

父と子の黙す隙間をきりぎりす

幹三

電車の音絶えて夜長の看取りかな

瑛三

終電が過ぎたという語で夜の長さを巧みに表現された。

遊子 選

長き夜のタクト一閃新世界

兵十郎

大陸を二等寝台長き夜

和江

虫を聴くひとり野に居る心地して

輝子

藤原京跡で昔実体験した。どこか寂寥感ある贅沢。

乱 選

葛原に風渡る時花の見ゆ

暁子

父に似て来りし長き夜の鏡

幹三

ラ・フランス盛ればキラリとガラス皿 眞知子

お洒落でハイカラな句。カタカナの使い方がよい。

参加者自選句

新米が今年も届く元気でね

朱美

線香の煙ごめんよ墓地のきりぎりす

瑛三

大陸を二等寝台長き夜

和江

さくさくと食めばあふれる梨の水

かな子

梨剥けば甘美なる汁零れ落つ

邦夫

おやつ時長さを競う梨の皮

恵子

燈籠の陰にいつものキリギリス

言成

葛の花踏みしだくほど人行けば

堯子

風にのる花の匂や真葛原

輝子

耳ふさぎ怪談せがみ来る夜長

兵十郎

ヴァイオリンとピアノのデュエット白露の日

茉衣

ラ・フランス絵心無きを悔やみけり

眞知子

長き旅終へし余韻の夜長かな

翠

古民家の奥行き深き秋日かな

盛雄

飛ぶよりも跳ぶが楽しき蝨

安廣

ラ・フランスの土産を貰ふ句会かな

遊子

寂光院山辺に隠る葛の花

乱

## 即吟

リコリス（球根性・洋種）彼岸花

卓上に白とピンクの彼岸花が飾られた。畦道に咲く真っ赤な彼岸花と形は同じだけれど、いぶんな趣の違った花である。ちよつと触れたり、のぞき込んだりしながら作句した。

一人居の自由やや倦み彼岸花

暁子

酷暑にも彼岸近づき彼岸花

堯子

華麗なれどなど寂しきや彼岸花

輝子

洋種なればピンクも赤し彼岸花

兵十郎

白と調和す洋種のピンク彼岸花

茉衣

彼岸花唐突に咲く茎の先

幹三

清楚なる句座のリコリス白ピンク

翠

カールせし睫毛や彼岸花の蕊

安廣

白と紅淡きが寂し彼岸花

乱

## ひとこと

山田安廣

九月の声を聞いても一向に涼しくならない昨今です。夏の疲れも出て体調にも影響が出そうな昨今です。皆様方健康管理には十分お気を付けて下さい。

披講の後のフリートキングで「亡き妻に梨の記憶を供えけり」という句が話題になりました。或る方から「梨の記憶」は「梨」そのものではないので、季語にならないのではないか、との発言があったのです。一方で、記憶そのものは供えられる訳はないので、梨そのものを供えた事によって昔の二人の思い出に浸られた」と理解すればよい、との意見も出て色々議論が弾みましました。結局、実際の梨を媒介にして追想に浸って居られるに違いないので、これは季語として認めて良い、と言う結論になりました。

他にも読まれた方の想いと選者の方の理解が随分違っていた事もありました。幹三さんによれば、一旦句会に出るとその句は全員のものとなるので、それぞれが自由に理解し、鑑賞すれば良いのだ、というお話で終わりました。

披講の後のこのような時間は貴重な時間です。